

# ペルー人の森林意識

(研究課題番号 07041062)

平成7、8年度科学研究費補助金 (国際学術研究)  
研究成果報告書

平成9年10月

研究代表者 今永正明

(静岡大学農学部)





ペルーアマゾンの水辺の村



## 研究組織

### 研究代表者

今永 正明 : 静岡大学農学部教授

### 研究分担者

逢坂 興宏 : 静岡大学農学部助手

吉田茂二郎 : 九州大学農学部助教授

松下 幸司 : 京都大学農学部助教授

J. R. Tello : アマゾンニア大学農学部教授

養父 志乃夫 : 和歌山大学システム工学部助教授

### 研究経費

平成7年度 6,300千円

平成8年度 4,400千円

### 研究発表

今永 正明(1997) 森林観の国際比較—南米の森林・その過去と将来を考  
える, 林業技術 663:28-30

# 目 次

はじめに	1
第1章 研究の課題と方法	3
第1節 研究の目的	3
第2節 研究の方法と調査地の概要	3
1. 研究の方法	3
2. 調査地の概要	4
第3節 調査内容	5
1. アンケート調査の実施方法	5
2. アンケート調査の項目	6
第2章 ペルーの森林と林業	7
第1節 国土と経済	7
1. 人口と国土	7
2. 政治と経済	10
第2節 森林資源	11
1. 土地利用の概要	11
2. 森林面積と主要樹種	12
3. 森林等の国家管理制度	16
4. 保護地域制度の再編	18
第3節 林業及び木材業	21
1. 森林施業	21
2. 製材加工	24
3. 林産物の需給	26
4. 林産物の貿易	27
第4節 森林行政機構と国家森林計画	30
1. 森林行政機構	30
2. 森林計画	32
3. 海外林業技術援助	33
第5節 森林・林業の課題	35
文 献	39
第3章 森林環境に対する意識	41
第1節 ペルー人の森林観	41
1. 日常生活と森林	41
2. 自然・森林への心情	43
3. 森林と人手	45
第2節 都市間、年齢層間の比較	47
第3節 アマゾン河流域都市を対象とするペルー人とブラジル人の比較	59
第4節 好まれる樹種	65
1. 親しみのある樹種	65
2. 一番好きな樹種	70
3. アマゾン河流域都市の比較	73

文 献	74
おわりに	76
要 旨 (スペイン語、ポルトガル語、日本語、英語)	78
参考資料	87
1. Conservation and Sustainable Development of Protected Areas of Brazilian Amazon	89
2. ペルーアンケート調査一覧	90
3. アンケート調査票 (スペイン語、ポルトガル語、日本語)	91
4. アンケート調査使用写真	94
5. ペルー調査結果 (単純集計結果)	95
6. 問3・4に対する樹種一覧 (ペルー、ブラジル)	101
7. MAPAS (購入済み地図一覧)	109

## はじめに

クスコは海拔約3400m、マチュピチュはそれよりほぼ1100m低いから、列車で3時間をかけて下るのであるが、盆地のクスコを出るため列車はいったん山腹を上り、そのためスイッチバックを繰り返すのである。

この間山腹のユーカリがいやでも目に付く。それは周りの景色から浮いている。ちょうど山腹工事のセメントに緑色を吹き付けて周りの景色から浮き上がって見えるのと同じである。

原生林をなくした後、ユーカリやマツで森林を造成することは隣国ブラジルでも行われている。早生樹種を導入することでパルプや燃材あるいは一部用材として利用するのである。おそらくペルーで導入されているのもこうした目的であろうし、こうした高地に木を植えていることにペルー人のけなげな営みが見て取れるのである。ただ景色としてきわめて浮いて見えるのであるがそのことは今は問わない。

しかしいつの日か現地の人があることに気づいて、郷土樹種で森林を再生したいと思うであろう。そこでその気づくまでの時間、そしてさらに郷土樹種を再生するに要する時間が必要となる。

雑木林といった形であれ郷土樹種の価値はこうした時間価値にあるのではなかろうか。

ところで研究代表者は過去3年間ブラジルで、森林開発と現地住民の森林意識に関する研究を行ってきた。そこでまずブラジルでの研究成果の一端を述べてみたい。

ブラジル南部サンパウロ州ではこの100年間に州面積の8割を占めていた原生林が1割以下に激減するのである。サンパウロ州森林院によると1850年の81.8%が1920年には44.8%、1952年には18.2%、1973年には8.3%になる。この事情はこの州の南に接するパラナ州でも同様であって、パラナ州の統計によると1895年の森林率84.1%が1980年には5.1%になるのである。こうした森林の壊滅的破壊をもたらしたものはコーヒー栽培にあるのだが、すさまじい森林破壊と言わざるを得ない。その結果サンパウロ州等では洪水や水質汚濁に悩まされているのである。

これに匹敵するいやそれ以上の森林破壊はタイにみられる。この国では1960年からの約20年間で森林がほぼ半減した。1960年度の森林面積は日本のそれと近い2740万ヘクタール（国土面積の52.6%）であったが、1978年度にはわずか1320万ヘクタール（同25.4%）になっている。この原因も農業開発といわれるが日本の森林率が戦前、戦後を通じてほとんどかわらず約70%で面積が2500万ヘクタールであることに比べ、そのすさまじさがわかる（堤利夫「タイ国の造林事情」、農学の未来像を求めて、第2号、四明会設立準備会編、1985年）。

そうしたブラジルにおいて、サンパウロ、クリチバ（パラナ州の州都）、マナウス（アマゾナス州の州都）で現地住民が森林や自然に対してどのような意識を持っているかについて調査した。調査は市民、大学生、高校生を対象に行った。回答総数は2125に及ぶ。質問は13問であったがその中に次のような質問がある。「あなたは、大きな古い木を見たと



き、何か神々しい気持ちをいただきますか。」と「あなたは、深い森に入ったときに、何か神秘的な気持ちをいただきますか。」である。これに「いただく」と答えた回答率を3都市の市民で見るとそれぞれ、サンパウロ99%、98%、クリチバ93%、93%、マナウス90%、88%となり、いずれもほぼ9割以上の人が肯定しているのである。市民が今このように考えようともブラジル南部のサンパウロ州やパラナ州ではもはやそうした「大きな古い木」や「深い森」はもうほとんど残っていないのである。フランスには「ナラを切るのに5分、育てるのに200年」という言葉があるが、ブラジルを代表するパラナマツにしても現在ほとんど姿を消し、大木を育てるには100年といった歳月を必要とする。

さて今回ペルー調査を行った意味はアマゾン河流域の森林の今後にとくに注目したからである。ブラジルではアマゾン河中流に位置するマナウスで調査したが、その上流がより大切であってそこはペルー領である。ペルーのイキトスを今回の重要な調査地点とした意味はそこにある。マナウスにせよイキトスにせよ現在その周辺は飛行機で観察する限り森林で覆われている。しかし一歩森林の内部に入ると大きい木は少なそうであったが、森林の質についてはより詳しい調査が必要である。

ペルーにおける調査結果は以下述べるが、先にみたように、森林に関する政策は一度誤るとその禍根を100年も残すことになる。ペルーに於いて我々の調査結果を参考に一日も早く長期の森林政策が確立されることを願ってやまない。

なお、本報告書の執筆分担は次の通りである。

今永 正明（静岡大学農学部） はじめに、第3章第1節から第3節、おわりに、要旨  
吉田茂二郎（九州大学農学部） 第1章、第3章第4節  
松下 幸司（京都大学農学部） 第2章

（今永 正明）